ファイナル ラウンド
FINAR ROUND
ヘッドギア筋肉女ボクサー
結城 カレン

ここはある場所にある地下ボクシングリング。
薄暗くライトがボクシングリングを集中的に照らす。この地下ボクシングリングに、2人のお互い違う性のボクサーが存在した。ボクシンググローブを装着した男と女のボクサー。

性別の違う男女のボクサーが2人きり、ボクシングの試合が行われているこの地下ボクシングリングで己の体力の限りの殴り合い。室内温度も高めの設定されたこの空間で少しでもパンチを打てば、汗が飛ぶ。パンチを貰えば汗が水しぶきのように飛び散る。

そんな男女のボクシングの試合も最終ラウンド。1ラウンド3分の全3ラウンド、インターバルは1分の限られた時間でお互いの男女のボクサー、狙うは「ノックアウト」。

カン！2ラウンドの3分が終了を知らせるゴングが鳴らされる。短い時間のインターバルが男女のボクサーが各コーナーポストでしばしの休憩。最後のラウンドで「ノックアウト」を狙うべく息を整える。

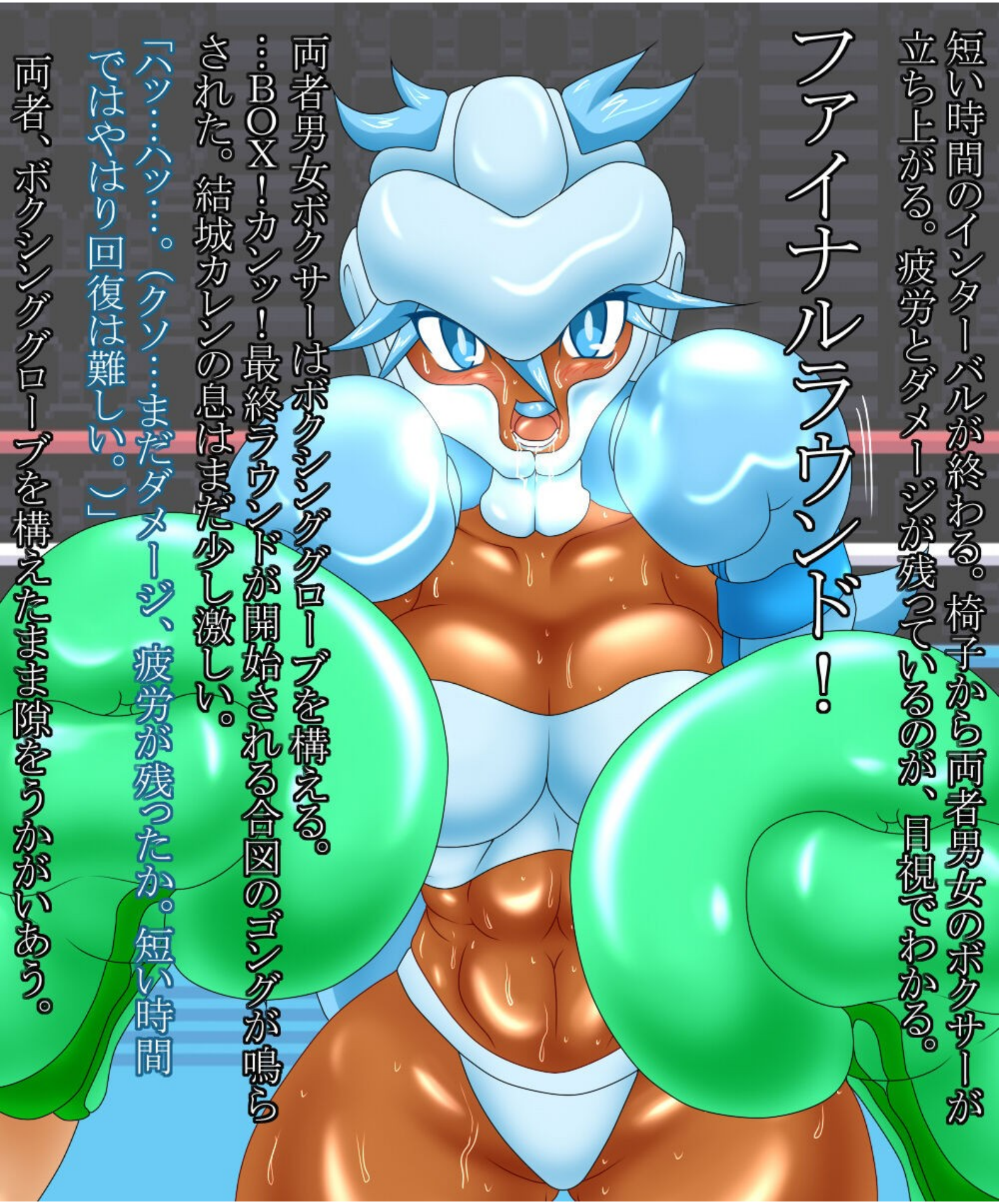
赤コーナー側の女ボクサーが用意された椅子にドカリと座る。女性にしては筋肉質で相手の男ボクサーも同等の身体、筋肉をしている。どっちが勝ってもおかしくないノーハンディキャップの戦い。

「ハア…！ハア…！」

大きく開けた口からたくさんの酸素を取り込み息を整える。大きく開けられた口の中はボクシングの疲労とダメージでドロドロの涎が滴り落ちる。このヘッドギアを被った女ボクサー。普通の女性より大い腕。割れた腹筋を兼ね備え、豊満な膨らみの乳房。彼女の名は…

「結城　カレン」。

「ハア…ハア…。この試合…。私が、貰う…。」


短い時間のインターバルが終わる。椅子から両者男女のボクサーが立ち上がる。疲労とダメージが残っているのが、目視でわかる。
ファイナルラウンド！
両者男女ボクサーはボクシンググローブを構える。
…BOX！カンッ！最終ラウンドが開始される合図のゴングが鳴らされた。結城カレンの息はまだ少し激しい。
「ハッ…ハッ…。（クソ…まだダメージ、疲労が残ったか。短い時間ではやはり回復は難しい。）」
両者、ボクシンググローブを構えたまま隙をうかがいあう。

時間が刻々と過ぎる。そしてファイナルラウンド開始して初動は男ボクサーの右パンチからはじまる。さすがは男ボクサーのパンチ。結城カレンは反応できず頬に男ボクサーのボクシンググローブが張り付く。パンッ！と乾いたパンチの当たる音から結城カレンの顔から汗が飛び散る。
「うぐぅ！（しまった！このボクサーのパンチに反応できなかった！）」
結城カレンの身体の疲労とダメージが反応力を低下させていた。
「くぅ…。相変わらず良いパンチだ…。」

結城カレンも打たれっぱなしと言う訳ではない様子。
少し離れ、男ボクサーの隙を伺う結城カレン。

「はぁ…ふぅ…（この男ボクサーも疲労と私のパンチのダメージは残ってるみたいだ…。反応力も低下しているはずだ…。さぁ…私に隙を見せろ！）」

一瞬、男ボクサーの動きに鈍さが生じた。その鈍い動きから男ボクサーのボクシンググローブが下がった。
それは片方のグローブが5cmの低下。この5cmの低下を結城カレンは見逃さない。

パン！

「ふん！そこだ！」「うっ！くはっ！」

結城カレンのパンチが男ボクサーの頬の張り付き、汗が飛び跳ねる。

結城カレンのパンチが男ボクサーにヒットしたが、パンチを打つ行為も疲労感が増す。それが結城カレンの隙を生み出し構えたボクシンググローブのガードが開く。
「！（ガードが開いた！ボディが空いてる！）」
ドスッ！
「うっ！うぷぅ！」
結城カレンのボディに男ボクサーの左パンチが張り付き衝撃を与える。結城カレンのボディに角度のいいパンチが疲労とダメージを増加させ結城カレンの口からマウスピースと涎が吹き出る。
「おふぅ…！はうぅ…（くっ！やるな…効いたぞ…。）」

男ボクサーからの角度のいいボディへの左パンチ張り付いた結城カレンの
一瞬の悶絶からすぐの行動。結城カレンの反撃は…
ドスンッ！
『うっ！…ぐはっ！』
結城カレンも男ボクサーのボディの左パンチを与える。こちらもまた
角度が鋭角で男ボクサーに与える疲労とダメージは女ボクサーが
与えられるパンチとは思えない衝撃だ。男ボクサーも堪らず顔が
下がる。
『ぐふっ…！（女とは思えないパンチだ！これは効いた…。）』
『はぁ…はぁ…。効いてるみたいだな…。』

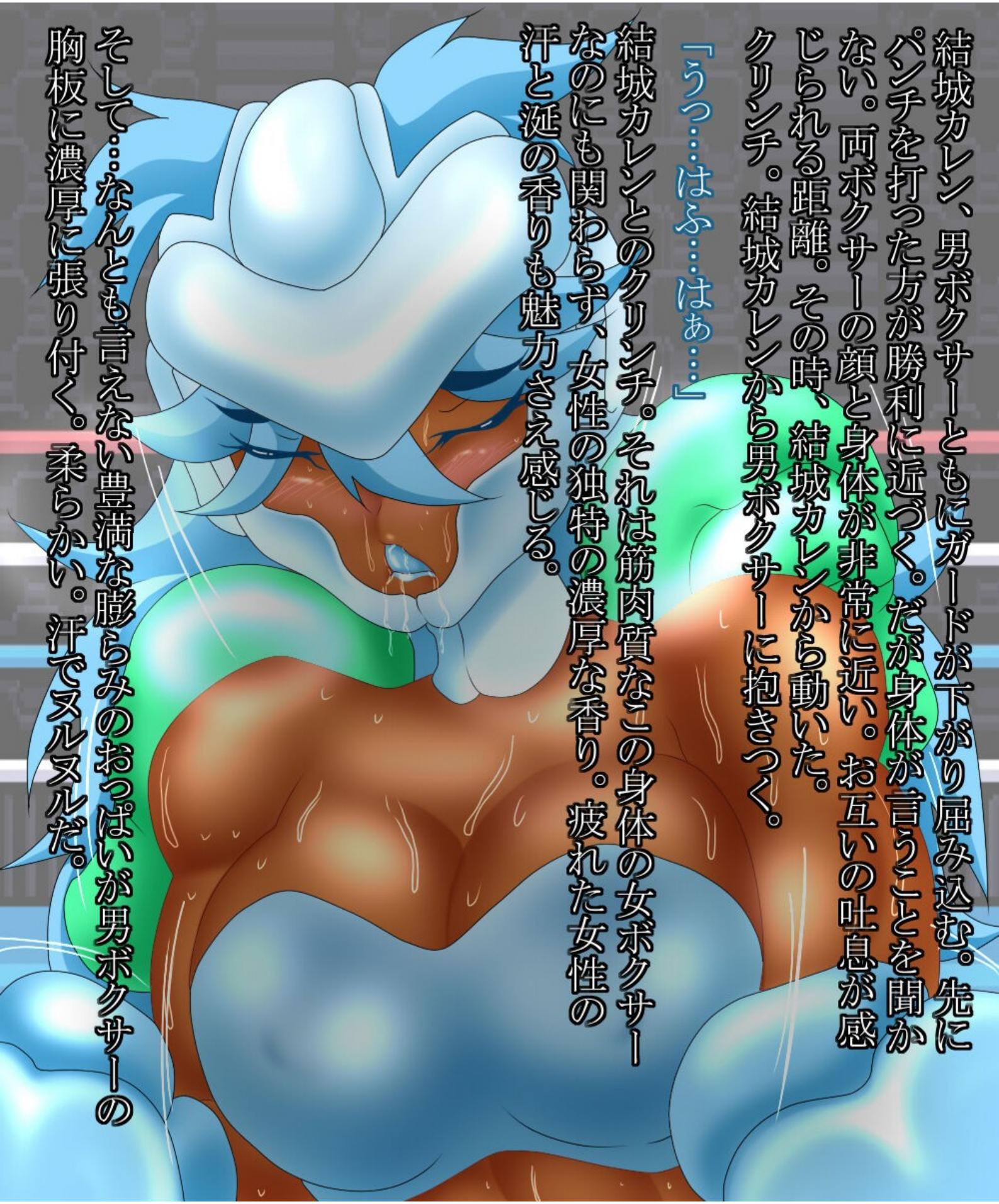
時間が刻々と過ぎ両男女ボクサーのあせりがでてくる。
「ノックアウトを取って勝利したい。」これがあせりに変える。時間がない。そう思う2人のボクサーは一斉にパンチを打ち出す。
パン！
パン！
「うん！ぐふん…」
「うっ！ぐはぁ！」
お互い一斉に出すパンチは互いの頬の張り付いた。そして身体がグラつく。

お互いのパンチで疲労とダメージは限界に達している。結城カレン、男ボクサーともにボクシンググローブのガードが落ち、身体がくの字にガクッと折れ屈み込む。

「うぐぅ…（くううぅ！まずい！身体が、おっぱいとボクシンググローブが重い！だがあの男ボクサーも屈んでいる。私のパンチが効いているみたいだ。だが私も効いてしまってフラフラだ…。）」

「ぐっ…ぐふん…！（この女ボクサー…男のプロボクサー並の強さだ。この女ボクサーの重いパンチ…効いた。）」

しばしお互い屈み滝のような汗と涎を流しながらも再戦のためにボクシンググローブのガード上げなければならない。だがそうもいかない。

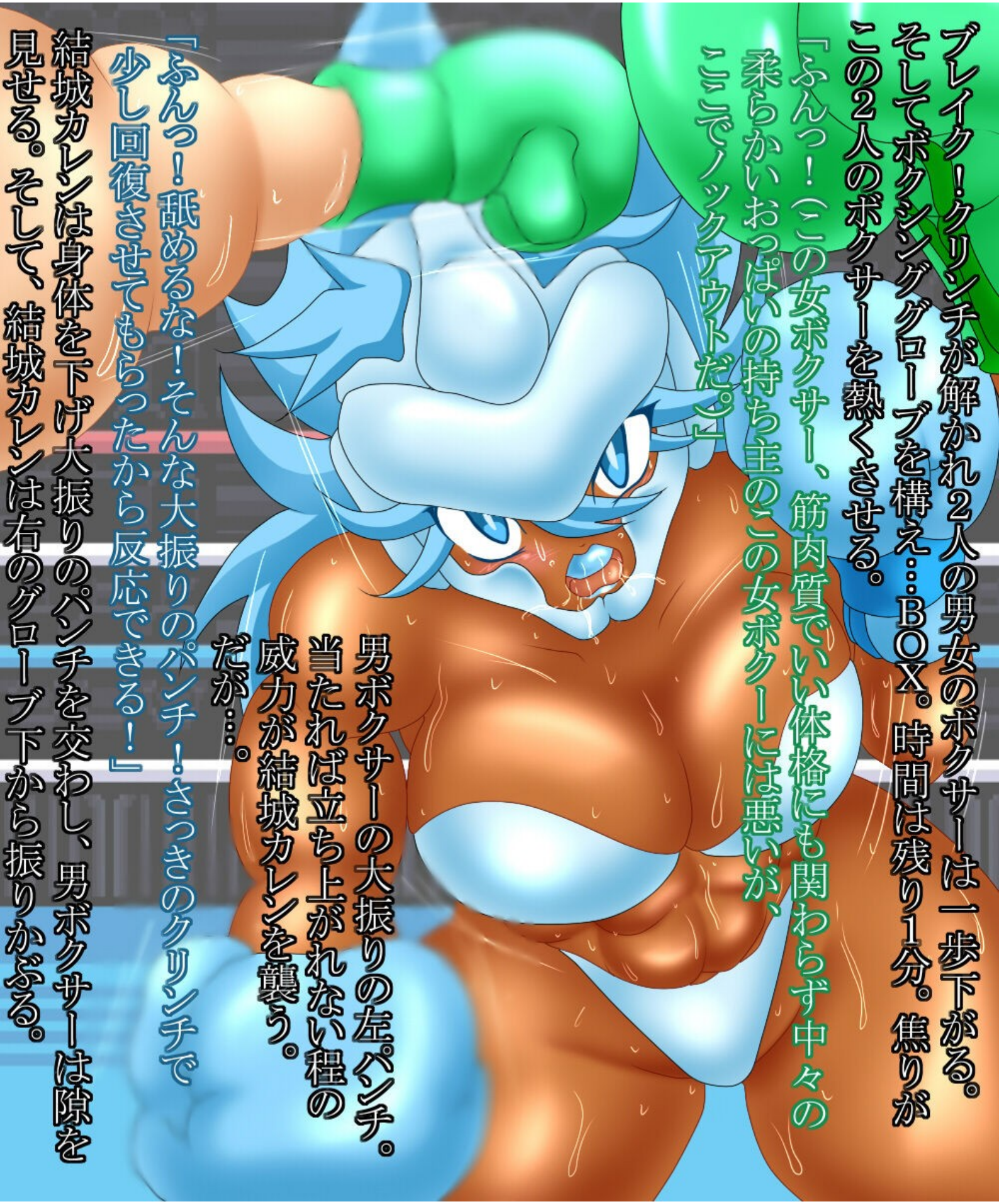


結城カレン、男ボクサーともにガードが下がり屈み込む。先にパンチを打った方が勝利に近づく。だが身体が言うことを聞かない。両ボクサーの顔と身体が非常に近い。お互いの吐息が感じられる距離。その時、結城カレンから動いた。クリンチ。結城カレンから男ボクサーに抱きつく。

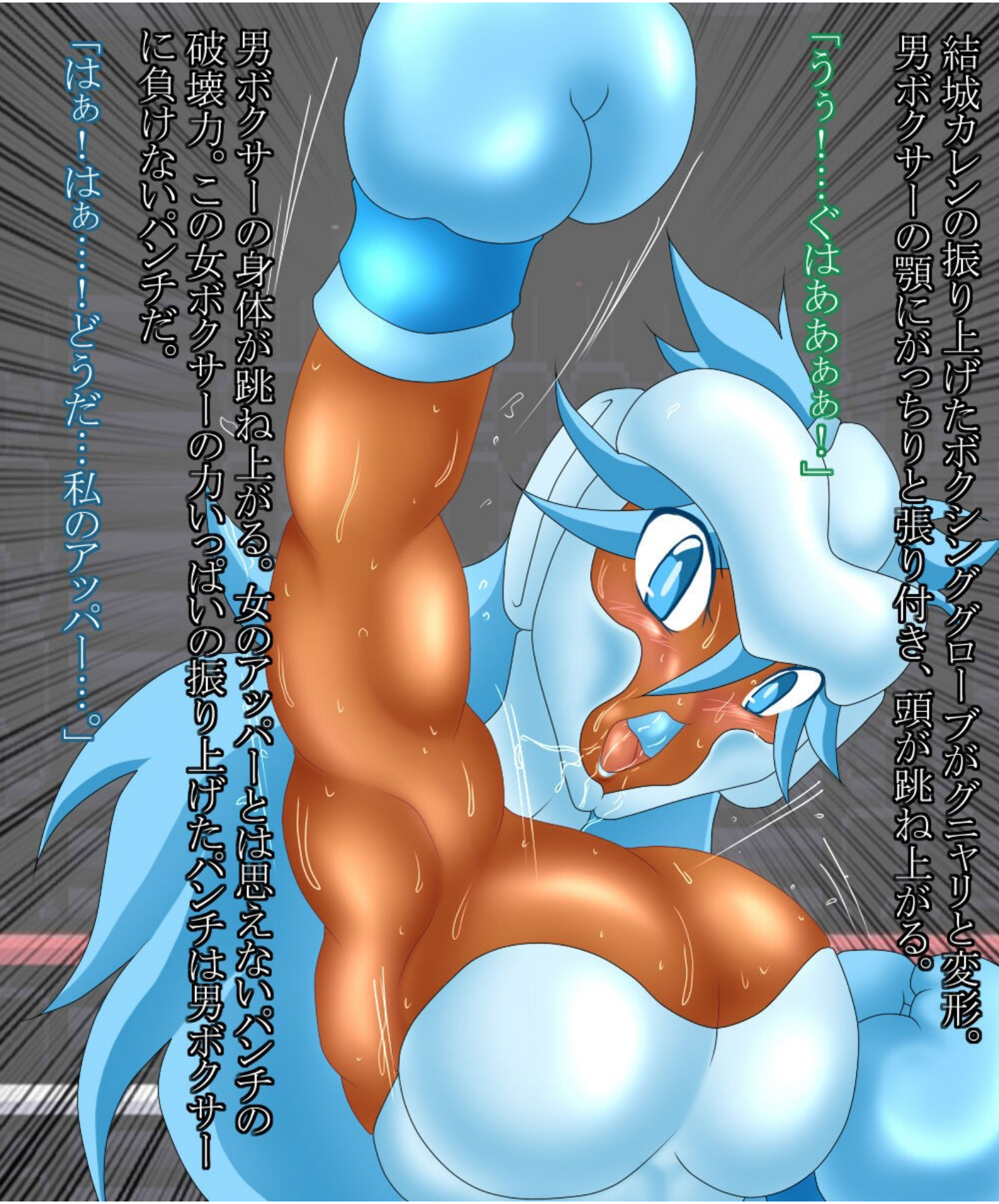
「うっ…はふ…はぁ…」

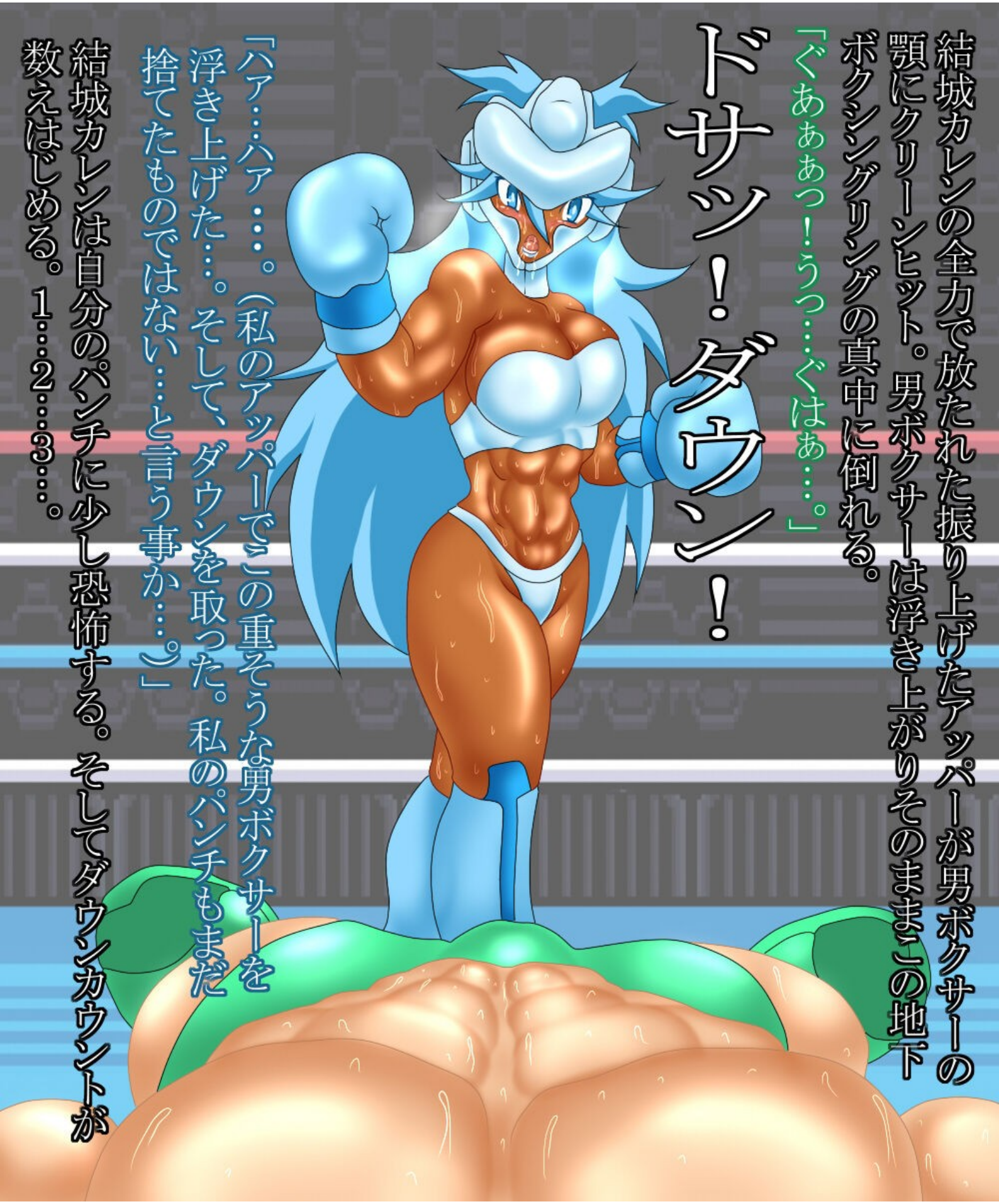
結城カレンとのクリンチ。それは筋肉質なこの身体の女ボクサーなのにも関わらず、女性の独特の濃厚な香り。疲れた女性の汗と涎の香りも魅力さえ感じる。

そして…なんとも言えない豊満な膨らみのおっぱいが男ボクサーの胸板に濃厚に張り付く。柔らかい。汗でヌルヌルだ。


ブレイク！クリンチが解かれ2人の男女のボクサーは一歩下がる。
そしてボクシンググローブを構え…BOX。時間は残り1分。焦りが
この2人のボクサーを熱くさせる。
「ふんっ！（この女ボクサー、筋肉質でいい体格にも関わらず中々の
柔らかいおっぱいの持ち主のこの女ボクーには悪いが、
ここでノックアウトだ。）」
男ボクサーの大振りの左パンチ。
当たれば立ち上がれない程の
威力が結城カレンを襲う。
だが…。
「ふんっ！舐めるな！そんな大振りのパンチ！さっきのクリンチで
少し回復させてもらったから反応できる！」
結城カレンは身体を下げ大振りのパンチを交わし、男ボクサーは隙を
見せる。そして、結城カレンは右のグローブ下から振りかぶる。

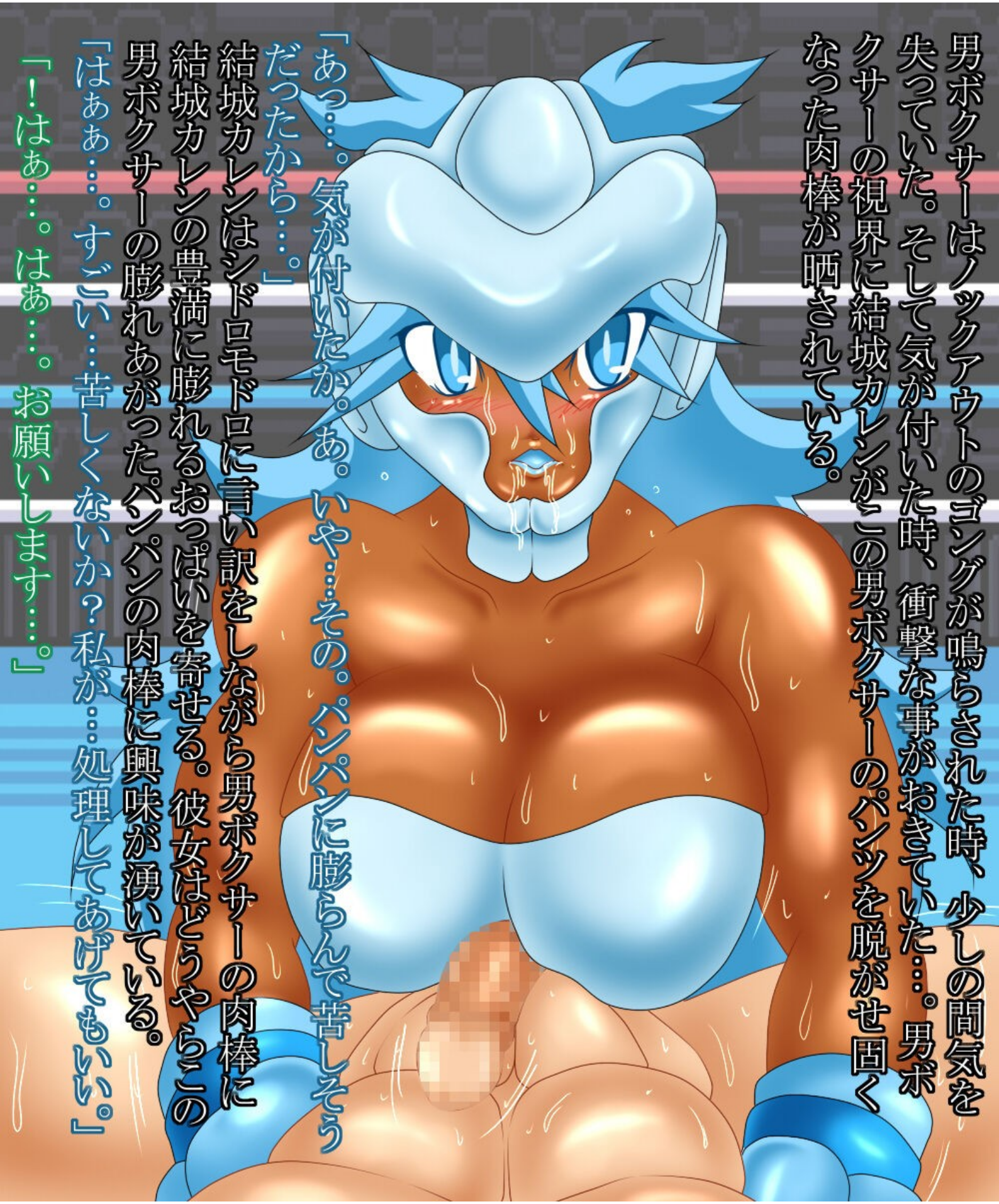
ドズン
！


結城カレンの振り上げたボクシンググローブがグニャリと変形。
男ボクサーの顎にがっちりと張り付き、頭が跳ね上がる。
『うぅ！…ぐはあああぁ！』
男ボクサーの身体が跳ね上がる。女のアッパーとは思えないパンチの
破壊力。この女ボクサーの力いっぱいの振り上げたパンチは男ボクサー
に負けないパンチだ。
「はぁ！はぁ…！どうだ…私のアッパー…。」

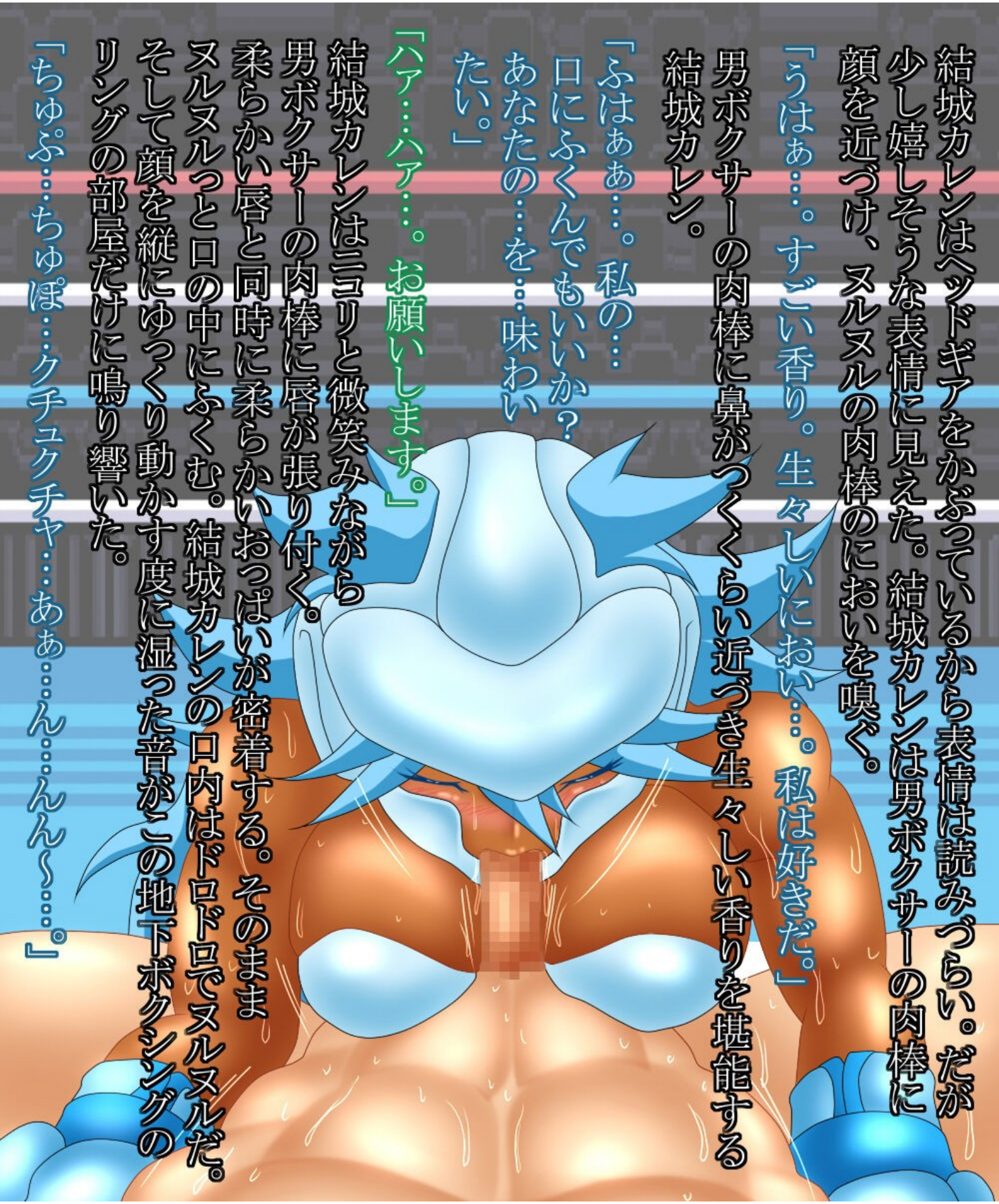

結城カレンの全力で放たれた振り上げたアッパーが男ボクサーの顎にクリーンヒット。男ボクサーは浮き上がりそのままこの地下ボクシングリングの真中に倒れる。
「ぐあぁぁっ！うっ…ぐはぁ…。」
ドサッ！ダウン！
「ハァ…ハァ…。（私のアッパーでこの重そうな男ボクサーを浮き上げた…。そして、ダウンを取った。私のパンチもまだ捨てたものではない…と言う事か…。）」
結城カレンは自分のパンチに少し恐怖する。そしてダウンカウントが数えはじめる。1…2…3…。

ダウンカウント4…5…6…。刻々と数えられる。
結城カレンは何か落ち着かない。フラフラと細かに歩きまわる。
「はぁ…はぁ…。うっ…！うんっ…！」
男ボクサーは立ち上がるために少しづつ身体を動かす。だが疲労と結城カレンのアッパーのダメージが残り立ち上がれそうにない。だが、何か悪い気はしなかった。今、視界に入った結城カレンの後ろ姿。そして薄暗いリングで卑猥に汗で輝く褐色の綺麗な丸みのある尻。
視界に入った結城カレンの卑猥に見えてきた事で男ボクサーの下半身の肉棒に反応しだす。その反応を結城カレンは見逃さない。
「…！うん…（この男ボクサー…あの下半身…さっきより大きく膨らんでいる！私のアッパーで…？私のこの身体で…？）」
結城カレンの目線は男ボクサーの膨らんだ下半身の肉棒。気になって仕方ない。結城カレンと言う1人の女としての性なのか…。

男ボクサーのダウン。カウントは…7…8…9…。
もうすぐ結城カレンの勝利。男ボクサーの身体の動きがピタリとまった。
…10！カンッ！カンッ！カンッ！
「ふふっ…。残念だったな。私の勝ちだ！」
結城カレンは高々に右ボクシンググローブを上げた。結城カレンのテンカウント、K.O.勝利。男ボクサーは疲労とダメージでまだぐったりして立ち上がれそうにない。


男ボクサーはノックアウトのゴングが鳴らされた時、少しの間気を失っていた。そして気が付いた時、衝撃な事がおきていた…。男ボクサーの視界に結城カレンがこの男ボクサーのパンツを脱がせ固くなった肉棒が晒されている。
「あっ…。気が付いたか。あ。いや…その。パンパンに膨らんで苦しそうだったから…。」
結城カレンはシドロモドロに言い訳をしながら男ボクサーの肉棒に結城カレンの豊満に膨れるおっぱいを寄せる。彼女はどうやらこの男ボクサーの膨れあがったパンパンの肉棒に興味が湧いている。
「はぁぁ…。すごい…苦しくないか？私が…処理してあげてもいい。」
「！はぁ…。はぁ…。お願いします…。」

結城カレンは左ボクシンググローブを器用に男ボクサーの肉棒を掴み縦にゆっくり動かす。ボクシンググローブに包まれた肉棒。柔らかい…。今まで味わった事のない感触。さらに結城カレンの右グローブで肉棒の先を優しく擦る。
「うっ！くはっ！」
「あっ！あぁ…！あなたの肉棒の先から…なんだ…！ヌルヌルした液体が…。気持ち…いいのか？私のグローブごき…。」
「はい…！くっ！気持ちいいです…！」
「ハァ…ハァ…本当か。…嬉しい…。」



結城カレンはヘッドギアをかぶっているから表情は読みづらい。だが少し嬉しそうな表情に見えた。結城カレンは男ボクサーの肉棒に顔を近づけ、ヌルヌルの肉棒のにおいを嗅ぐ。

「うはぁ…。すごい香り。生々しいにおい…。私は好きだ。」

男ボクサーの肉棒に鼻がつくくらい近づき生々しい香りを堪能する結城カレン。

「ふはぁぁ…。私の…口にふくんでもいいか？あなたの…を…味わいたい。」

「ハァ…ハァ…。お願いします。」

結城カレンはニコリと微笑みながら男ボクサーの肉棒に唇が張り付く。柔らかい唇と同時に柔らかいおっぱいが密着する。そのままヌルヌルっと口の中にふくむ。結城カレンの口内はドロドロでヌルヌルだ。そして顔を縦にゆっくり動かす度に湿った音がこの地下ボクシングのリングの部屋だけに鳴り響いた。

「ちゅぷ…ちゅぽ…クチュクチャ…あぁ…ん…ん～…。」

結城カレンは男ボクサーの肉棒を口に含み舌でなぞるように舐めまわす。そして柔らかい唇で肉棒を擦る。ゆっくり、ゆっくり行為をすることによって肉棒からネットリとした液体が出てくる。結城カレンの口から肉棒が離れ、顔を上げる。結城カレンの舌と肉棒の先にネットリとした液体が糸が引きつないだ。
「うん…うぷぅ。すごい味だ…。これが地下ボクシングの特有の味と言う物なのか？それならば…少し苦味もあったが美味しかった。」
「ハァ…！ハァ…！」
男ボクサーは結城カレンのゆっくりしたフェラチオの快楽に完全に落ち、息使いが激しくなる。

結城カレンは仰向けにダウンしている男ボクサーの腰を持ち上げ膝に乗せる。
「私…。知っているんだ。あなたが私とボクシングの試合中…。あなたの視線は私のおっぱいに向いていた。ふふ…男の人っておっぱい…好きなんだな。こんな私みたいなのでも…。」
「ハァ…！ハァ…！はい…。君みたいな…綺麗な丸みのおっぱいは中々お目にかかれないです…。」
「…！ありがとう…。私、自分のおっぱいを褒められた事がない…。」
結城カレンは男ボクサーの膨れあがったパンパンの肉棒をおっぱいで挟み込む。結城カレンのおっぱいの柔らかい膨らみに包み込まれる肉棒をゆっくり擦りあげる。結城カレンの筋肉質な身体とは思えない柔らかいおっぱいが快楽に誘う。

ネチッ、クチュ、クチャ…。結城カレンのゆっくりと上下に動かされたおっぱいに包み込まれた男ボクサーの肉棒がしっとりとしてきた。

「うぅ…うくぅ…どう…？気持ちいい…？私のおっぱい…。」

「ハァ…！ハァ…！気持ちいいです…。柔らかいのに…グハッ…！なんて乳圧…。」

「うん…。いっぱい…気持ちよくなってほしい…。」

その時…、男ボクサーの肉棒がビクッ！ビクッ！と振動しはじめた。

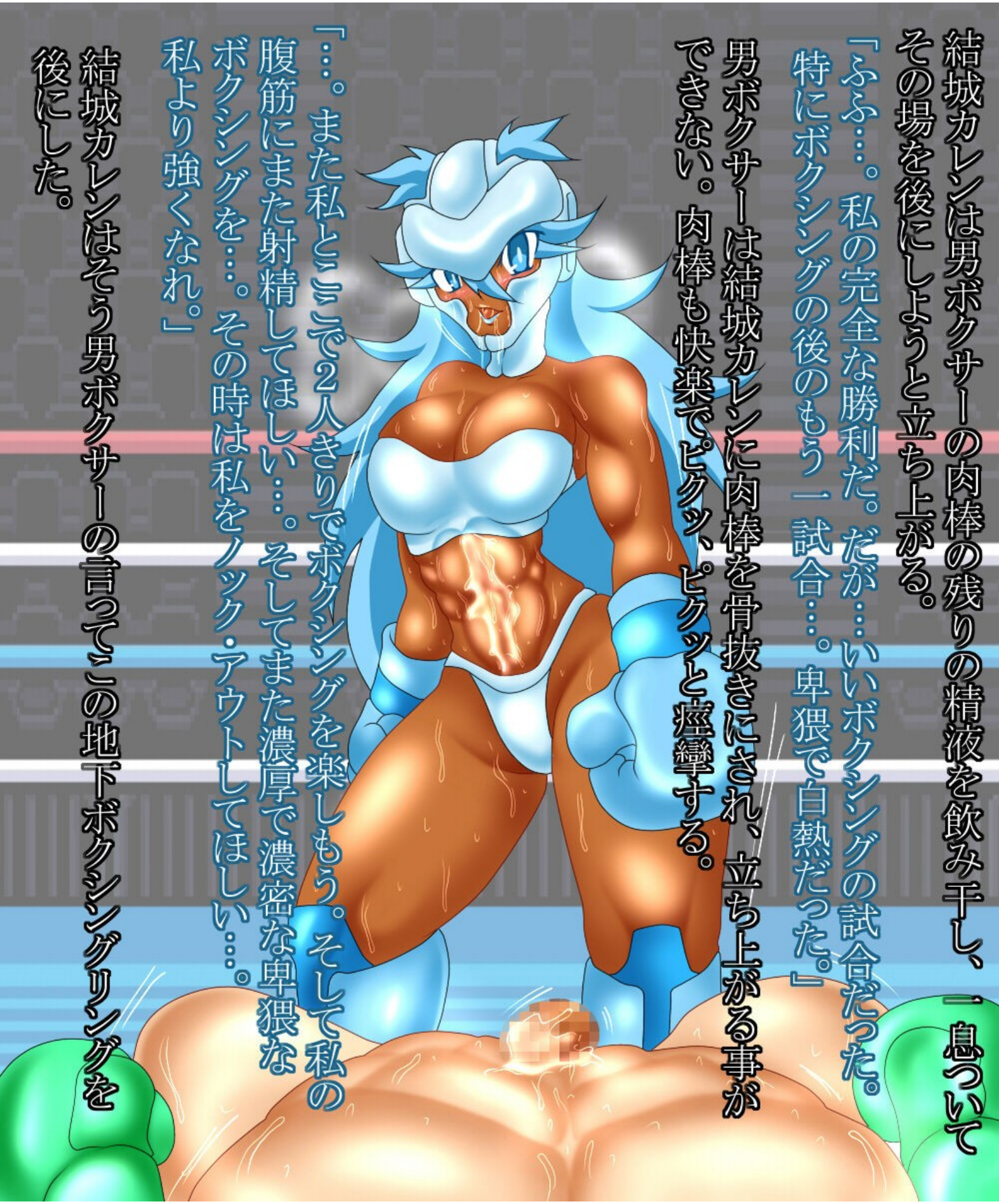
「うっ！うっ…！ぐふん…！ハァ…ハァ…！」

「…？えっ！ええ！もしかして…射精…？」

「うぐっ…！はい…！もうイきます…。」

男ボクサーの肉棒は絶頂に近づいていた。射精が近い。
「ハアッ！ハアッ…！うぅっ！もう…。」
「あぁ！あぁっ！待って！もう少し我慢して！」
結城カレンはとっさにおっぱいから肉棒を解放する。
何をしようとしているのか…。結城カレンは男ボクサーの肉棒の先を
自分の腹筋に向ける。
「よし…。いいぞ。私の腹筋のいっぱいかけて…。私の腹筋で
受け止めたい…。さぁ、いつでもイってほしい…。」
「うっ…。あぁ…！ぐはぁ！イく！」
ドピュ、プシュ、ドプッ…
「あぁ…。いっぱい射精したな。私の腹筋があなたの精液でドロドロだ。」

男ボクサーの肉棒は結城カレンの豊満なおっぱいのスローな
「パイズリ」によって絶頂に達し、結城カレンの要望で結城カレン自身の
腹筋に射精し、腹筋は男ボクサーの精液でドロドロになった。
「あぁ…。あったかい…あなたの精液で私の腹筋が汚されてしまった…。
なんて卑猥なんだ…。私をこんなエッチな気分でこの神聖なる
ボクシングリングで卑猥な行為をするなんて…。中々、良いものだな。」
結城カレンは射精したばかりの
肉棒をまた口に含む。
「あむぅ…んっ…
ちゅぷ…にゅぷ…
ん…ん…。ゴクンッ。」
結城カレンは口に含んだ肉棒に残った精液を
フェラチオの要領で口内に集め精飲。
「ちゅぽ…。うん…あなたの残った精液…、おいしかった。
苦味があるんだな。ご馳走様…。」



結城カレンは男ボクサーの肉棒の残りの精液を飲み干し、一息ついてその場を後にしようと立ち上がる。

「ふふ…。私の完全な勝利だ。だが…いいボクシングの試合だった。特にボクシングの後のもう一試合…。卑猥で白熱だった。」

男ボクサーは結城カレンに肉棒を骨抜きにされ、立ち上がる事ができない。肉棒も快楽でピクッ、ピクッと痙攣する。

「…。また私とここで2人きりでボクシングを楽しもう。そして私の腹筋にまた射精してほしい…。そしてまた濃厚で濃密な卑猥なボクシングを…。その時は私をノック・アウトしてほしい…。私より強くなれ。」

結城カレンはそう男ボクサーの言ってこの地下ボクシングリングを後にした。

結城カレン（28）

身長 165cm 体重 62kg
本職 サウナ施設の熱波師
　　元プロボクサー
好きな物 サウナ スポーツドリンク
　　ショートケーキ
嫌いな物 ピーマン ゴーヤ
得意パンチ 低姿勢からの
　　振り上げアッパー

ヘッドギアを愛用している女ボクサー。ヘッドギアを取ると髪が跳ね上がる。筋肉質な身体をしているがこう見えても現役の時より筋肉量は減ったが力強いパンチを打つ。

ホホ〜〜。グリーンフィールズボクシングクラブに入って、1週間もたたないでうちの地下ボクシングリングでおわったあと「H」なボクシングですか〜〜〜。元プロのボクサーさんですよね〜〜。このクラブの会長の私として なんとも言えない事例です。ちゃんと許可をとってから「H」なボクシングをしてくださいね。

ハイ。

スイマセンでした。

※緑さんの許可をとりましょう。

見てくれて…
ありがとう。
カレン